

政経研究時報

No. 9-1 (2005. 6)

財団法人 政治経済研究所

〒136-0073 東京都江東区北砂1丁目5-4

Tel.03-5683-3325 Fax.03-5683-3326

http://www2.odn.ne.jp/seikeiken/

E-mail:seikeiken@pop12.odn.ne.jp

目次

海峡が隔てる差異	趙景達	・(1)
政治経済研究所・研究会の活動報告		・(4)
環境・廃棄物問題研究会		
東京問題研究会		
シンポジウム「東京空襲を考える」に参加して	原直男	・(7)

《公開研究会の記録》

海峡が隔てる差異

——歴史社会的差異から見た日本と韓国・アジア——

趙景達
(千葉大学教授)

本年3月29日の公開研究会でのご報告の内容を、
あらためてまとめていただいたものです。

一衣帯水といわれるだけに、朝鮮半島と日本は歴史的に最も密接な関係を持っている。しかし朝鮮海峡は、韓国社会と日本社会との差異をもたらすのに十分な距離であった。同じく漢字・儒教文化圏に属しているとはいっても、実はその文化はおろか、社会の仕組みや人々の価値観など、相当に違っている点が多い。

ここでは、両国社会の違いの中に、日本が近代国家建設に成功した秘密の要因をさぐるとともに、それがまた同時に今日の日本の悩める姿の遠因をなすものでもあることについて論じたい。またそうした議論を前提に、アジアとグローバル化の問題についても考えてみたい。

I 日朝近世社会の違い

日本と朝鮮は、近世社会（朝鮮では李氏朝

鮮王朝後期に相当）において同じく小農社会を形成していたという点では共通性を持っていた。しかし社会の仕組みは大分違っていた。まず村の在り方から見てみると、日本では土地の売買が原則禁止で、村落間移住も実質的にきわめて困難な状況であったのに対し、朝鮮では土地の売買も村落間移住も全土的に自由であった。朝鮮にはもとより戸籍があったが、日本の宗門改人別帳ほどには厳正なものではなく、戸籍に記載されない漏戸が多く存在した。従って、朝鮮にも日本の五人組と同様の性格を持つ五家統という隣保組織がありはしたが、それは五人組のように有効に機能しなかった。もちろん、トゥレと呼ばれる労働共同組織に典型的に見られるように、朝鮮の村にも共同体規制が存在したが、日本の村に比べてはるかに開放的であった。

要するに日本は、前近代社会においてすでに相当に規律統制が行き届いた社会であったと言える。それは民衆運動の在り方についても言える。日本の百姓一揆は、あ

くまでも「百姓の世界」を前提に展開され、終始規律的であり、非暴力が原則であった。ところが朝鮮の民乱は、ある段階までは規律正しく民訴を行うが、最終局面で暴力化し、在地役人が数人殺害されるという場合が少なくない。それゆえ民乱と呼ばれるのである。また、村落共同体間に活躍の場を持つ義賊が朝鮮には多く存在したが、日本では国定忠治などが伝説化されている程度に過ぎない。実は義賊現象は、とりわけ近代移行期に世界史的、普遍的にその存在が広範に確認されるのだが、その存在が過少な日本は特殊である。朝鮮のような社会——世界史的にはより一般的——では集団志向よりも個人志向が成長していたことが伺われる。

個人の自律性という点では、支配階級たる武士と両班にも違いがある。武士が主君に従属してその個人意思を強く押さえられていたのに対し、朝鮮の両班は道徳と政治を連続的に把握する朱子学の世界をもつて国王にさえ堂々と諫言を行うことを矜持としていた。両班は本来文武の官僚を意味したが、自身が官僚でなくともその子孫であったり、またはそうした生活態度をなした者を広く両班、より厳密には士（ソンピ）と称するようになった。彼らは在村的存在であり、民乱の指導者になることがしばしばであった。民衆とともに決起した武士がほとんど大塩平八郎しかいない日本との差異は際立っている。両班や士と自覚する者たちは、韓国併合直前日本に義兵戦争を果敢に挑んだ。彼らは客観的には「国」のために殉じたが、その主観では自らが信じる「道」のために殉じたと言える。幕末期に「国体」を創造（発見）し、それに殉じようとした勤皇の武士とはおよそ違っている。

II ムラ社会の日本とグローバル化

上記のことを勘案して明治維新を説明するならば、日本は全国の無数の閉鎖的な村々に天皇制という網＝「国体」を被せることによって壮大な村＝国民国家をつくりあげること

に成功したと言える。内を固めることで、開国の波に飲み込まれることを拒絶したのである。朝鮮に比べれば、日本には国民国家を建設しやすい土壌があったと言うこともできよう。中国の場合は、孫文がいみじくも「散沙の民」と評したように、その村は朝鮮以上に開かれすぎており、村落共同体などなかった。

かくして誕生した新生日本は、アジア諸国にも近代文明の先駆的な取得者としての強烈な自負から同様な国づくりを迫り、アジア連帯を唱えた。しかし結局は、アジア諸国の落後性を軽侮し、単独による脱亜入欧を目指した。脱亜主義者の福沢諭吉にとって、文明が手段であり国家こそが目的であったことは、つとに知られていることである。文明への帰依を説きつつ、その実それはあくまでも西欧文明に対するものであり、アジアの文明に対する共感は全くといっていいほどなかった。そしてそこには、恐ろしいほどの日本至上主義があった。

今や数百年続いた日本のムラ社会は、崩壊寸前である。グローバル化によるところが大きい。地域内の協力関係はとうに希薄なものになっている。談合は禁止されたし、年功序列制は解体したも同然である。ムラ社会的な論理に支えられて圧倒的な強さを誇った自民党も、もはや単独の力では選挙に勝てなくなった。

アメリカが国際政治・経済・文化の各方面において覇権を握ろうとし、ヨーロッパもEUを立ち上げる中であって、アジアも無策でいられないのは当然である。アジア域圏において圧倒的な経済力を誇る日本が応分の役割を果たすべきことを求められるのも、理解されよう。しかしそれは、日本中心の秩序づくりをせよということでは決してない。かつて構想された独善的な「大東亜共栄圏」の再版のようであっては、アジアの警戒と失望を買うばかりである。その意味でFTA交渉も慎重に進められる必要がある。

そして何よりも、過去の清算を今度こそはきれいにすることが求められる。日本政府は

すでに精算済みであるという見解であろうが、アジア諸国の人々は、韓国・北朝鮮・中国などを始めそう思っていない。言葉では謝罪しても、元従軍慰安婦や元被強制連行者、元軍人・軍属への国家的な戦後賠償は、何ら行っていないのである。日本が行った過去の侵略を合理化しようとする、閣僚や議員、地方自治体首長などの事あるごとの発言は、隣国を痛く傷つけているし、不信感を増幅させている。以前から論議されていた首相の靖国参拝や「新しい歴史教科書をつくる会」教科書の検定合格は、ついには中国や韓国の反日デモを誘発するに至った。ムラ社会を前提として容易に誕生し得た日本の国家主義は、アジアとの協調をなす上において、今や大きな桎梏となっている。

III グローバル化とアジア

「公」とは何か。中国や朝鮮では、天下の意であって国家そのものを意味する言葉ではない。しかし日本では、「公」とは古代より国家や天皇を意味する言葉であった。すなわち国家が天下であり、君主も「公」であり得た。皇帝や国王といえども「私」とされた中国や朝鮮の思想構造のあり方との違いは、明瞭である。今日、国民国家的世界秩序がなお存続してはいるが、グローバル化の中で天下を「公」とする認識だけは、共有されてしかるべきであろう。日本一国を「公」とする認識から目覚めなければならない。

IT 革命は、情報が一瞬の内に地球をかけめぐれることを可能にした。資本の多国籍化は進展するばかりである。日本においては、少子化が産業を空洞化させて年金行政を危機に陥らせ、移民労働者を受け入れざるを得ない状況が形成されている。もはや反グローバリズムを唱えて、ムラ社会に帰ることは不可能である。しかしグローバル化への対応は、その仕方に問題をはらむにせよ、韓国や中国の方が日本よりはるかによくできている。それはもとより両国には日本のようなムラ社会が

なかったことによっているものと思われる。

グローバル化はアメリカ化であって、好ましいことではない。それゆえ私は、「アメリカ化を受け入れよ」と言っているのでは決してない。それへの対応策として、アジアとの一体性を強めることによって、アメリカ発のグローバル化に対応するしかないと言っているのである。

確かに、グローバル化は人々を不安にさせる。しかし、排外主義的方向に走ってはアジアの信頼はますます遠ざかるばかりである。

「公」＝国家観から離れて人間としての「個」を見つめ、「閉ざされたムラ社会」から「開かれた地域社会」をつくるとともに、新たな相互扶助システムを創出することが求められる。

かつて GHQ 占領下において、「日本を米国の属国となし」てほしいという手紙がマッカーサーのもとへ多数舞い込んだ。マッカーサーはそれらを見て、「東洋人は勝者にへつらい敗者をさげすむ習性がある」として軽侮したという（袖井林二郎『マッカーサー元帥様』）。イラク派兵がアメリカ（国民）の真の尊敬を受けるなどは到底考えられない。そのことは韓国も同様である。無造作にアメリカばかりに開くグローバル化ではなく、いわばアジアに開かれたグローバル化が求められているということである。

しかし私は、東アジア共同体がすぐにできるなどとは考えていない。すぐにもできそうな幻想を振りまくのは、無責任というものである。キリスト教的価値観が一元的に支配するヨーロッパと比べれば、アジアは様々な面ではるかに多面的である。東アジアに限ってもそうであることは、朝鮮と日本を例にとって上述した通りである。まずは互いの差異を十分に認識することが肝要であり、それにはまだまだ多くの時間を要するように思われる。

財団法人政治経済研究所・研究会の活動報告

(イ) 環境・廃棄物問題研究会

「環境・廃棄物問題研究会」は、環境問題および廃棄物問題に関して自由に討論・意見交換のできる場を設定し、調査研究活動の総合化と進展に寄与すること。併せて、これらを通じて研究所と外部関係者との人的な結びつきを広げ、研究所の活動基盤の強化・発展に寄与することを目的に、昨年9月に発足しました。

研究会は、現在のところ隔月の研究例会を軸に運営されていますが、過日開催された2005年度総会では、研究例会に加えて見学会の企画や、研究プロジェクトの立ち上げなどを内容とする「年間計画」が承認されました。

研究プロジェクトでは、「環境・廃棄物法制点検総合特別プロジェクト」（仮称）の立ち上げが準備されています。この特別プロジェクトは、現在の環境・廃棄物法制（法令、政策、運用）に関して、問題や疑問を感じている人がそれぞれ自由に課題設定を行い、「集中登山」方式により点検・評価し、問題点を整理・検討することを展望しています。

研究会メンバーには、研究者に限定せず幅広く参加を呼びかけており、現在学生、実業家、市民活動家などを含めて53人（内当研究所の所員は8人）の方が登録されています。研究会の運営は、総会で選出された運営委員会（現在19人、内所員5人）が担っています。

今後は、研究例会をより充実させていくとともに、研究プロジェクトを軌道に乗せ、将来的には科研費申請なども展望し、継続的な

研究活動が旺盛に展開されるように工夫していきたいと考えています。所内外の関心ある方が多数参加くださることを期待しています。

研究例会は、奇数月の第三土曜日に定期的で開催することにしてあります。例会は、セミオープン扱いになっており、研究会メンバー以外でも参加は可能です。

現在まで研究例会において報告されたテーマは次のとおりです。

【第1回研究例会】（2004年9月18日）

- ①「劣化ウラン弾をめぐる諸問題」
- ②「産業廃棄物不法投棄の原状回復事業と費用負担の実態——いわき、能代、青森・岩手県境、豊島など——」

【第2回研究例会】（2004年11月20日）

- ①レビュー：「環境・廃棄物問題をめぐる状況——9月～11月を中心に——」
- ②「生協における環境対策」
- ③「輸入食品の現状と汚染の実態」

【第3回研究例会】（2005年1月20日）

- ①トピック：「エベレストにおける放射線測定」
- ②「エコループ計画と私たちの対案」
- ③「六価クロム事件の再検証」

【第4回研究例会】（2005年3月19日）

- ①ショート報告：「京都議定書発効とサマータム」
- ②「環境配慮型社会開発過程の諸段階について」
- ③「拡大生産者責任と廃棄物会計—特に容器包装リサイクルについて—」

【第5回研究例会】（2005年5月21日）

- ①ショート報告：「自動車リサイクル工場を見学して」
- ②「日本の中古車輸出と島嶼国における廃車問題——パラオを事例として——」
- ③「『環境（廃棄物）鑑定』による廃棄物の

削減と再資源化推進——「子供を主役とした地域環境学習」の勧め——

以上
(運営幹事 小野塚春吉)

決に向かっていているのか」という問題を正面から具体的に検証してみる必要があった。こうした具体的な政策の検証が極めて不十分であることへの危機感があった。

第3に、一自治体とはいえ政策のデパートともいえる都政を分析するには、個人の研究では限界があり政治経済研究所のスタッフを中心に学際的な研究を継続的に展開していくことが必要であった。

こうした問題関心で東京問題研究会はスタートした。北田政治経済研究所所長（当時）と小宮常務理事が研究会設立準備会の中心メンバーとして参加され、2度にわたる準備会を経て、3年間の研究プランを立案し、メンバーや参加団体の呼びかけを行っていった。北田所長、小宮常務は、参加団体への呼びかけにあたっては、都庁関係労組、建設経済研究所、東京自治問題研究所、東京地方労働組合連合会などへ直接足を運ばれ、研究会設立の必要性・意義を説いて回られた。

第1年次は、国際比較（ロンドン、ニューヨーク）や美濃部都政以来の歴史的研究、世界都市論など石原都政の歴史的な位置について理論的な研究を行い、2年次は、石原都政の具体的な施策について検証と対案の検討を行い、3年次は石原都政2期目の最後の年にあたり、それらの研究成果を何らかの形で公刊する、という計画である。

研究会は現在のところ12名で構成され、研究者では都市計画、地方自治論、公共事業論、産業構造、農業問題、基地問題、環境政治学などの専門家が、都庁労働者では衛生、教育、税務の労働者が参加し、研究者と現場労働者の共同研究という新しい試みが始まっている。参加団体としては、建設政策研究所、東京自治問題研究所、都庁職などが、政治経済研究所からは、北田、小宮、北村、南雲、武居の5名の研究員が参加しており、第10回研究会では柳田純也研究員に特別報告をお願いした。政治経済研究所は事務局団体として、ニュース・レターの発行（現在第3号まで発行し第4号を準備中）、資料の収集、会議室の確保

理論的検討から施策の具体的検証へ

——東京問題研究会の1年半を振り返って

東京問題研究会は、石原都政の全面的な研究を意図して2003年12月にスタートした。研究会発足時の問題関心は以下のとおりである。第1に福祉予算の削減など都民生活を犠牲にする施策を展開している石原都政が、2003年4月の一斉地方選挙で309万票という高い得票数を獲得して再選を果たした事実から出発している。1975年の都知事選挙で美濃部知事に敗れ政界を引退したはずの石原がなぜ再登場し、またなぜ高得票を得て再選されたのか、この事実に正面から向き合い、石原都政の歴史的な位置を正確につかむ必要があった。都民は石原のパフォーマンスに騙されている式の分析では、石原都政に到底太刀打ちできないと考えたからである。

第2に、石原都政への高支持率の背景には、グローバリゼーションとその下での新自由主義的改革という新しい要素とともに、これまでの保守陣営の政策のバージョンアップがあるのではないかという問題関心である。ディーゼル排気ガス規制、救急救命医療、新銀行の設立などには、東京の現状からみて一定の根拠があることが明らかとなっていた。しかし、ディーゼル排気ガス規制を環境政策全体の中に位置づけ直し、「東京の環境問題は解

と運営などその中心的な役割を担っている。

実質的な研究会のスタートとなった昨年3月の第3回研究会では、名古屋大学教授で都政研究の第一人者である進藤兵氏を招いて『石原都政の歴史的 position とその特質』と題して記念講演を行った。進藤氏からは、当研究会の研究方向について多くの示唆をいただいた（ニュース・レター第1号参照）。

1年次計画の研究を第11回研究会（今年4月2日）までで一応の区切りをつけ、2年次計画である石原都政の政策の具体的な検証と対案づくりに着手したところである。今後は東京における青年の意識動向、都市計画上の問題点、都市再生を始めとする公共事業の問題点など、来年春にかけて個々の政策レベルの検証を積み重ねていく予定である。その成果は、随時、本研究所のディスカッション・ペーパー等に発表する予定である。

研究会の課題としては、福祉分野の専門家と地方財政の専門家が不足している点、政治経済研究所支援の下その研究助成金により運営費をまかなっているが、会議室を借りるだけで精一杯の現状である。今後は、これらの分野の研究者の参加を呼びかけメンバーを補強しながら、財政基盤も強化し、来年には研究会として、石原都政の心臓部に突き刺さる批判と対案を世に問いたいと決意を固めている次第である。

これまでの研究会のテーマと報告者

第1回（準備会）2003年12月10日 3年間の研究テーマ、体制の検討

第2回（準備会）2004年1月29日 個人・団体への呼びかけ、正式スタートについて

※東京地評、東京自治労連、建設政策研究所、都庁職衛生支部、東京自治問題研究所他を訪問し参加を要請

第3回（公開研究会）3月9日『石原都政の歴史的 position とその特質』進藤兵教授（名古屋大学法学部）

第4回 5月8日『多国籍企業化と東京における都市改造・首都改造』武居秀樹・会員

（都留文科大学）

第5回 7月20日『「都市再生」の破綻の必然性と対抗勢力の新たな結集』今井拓・会員（建設政策研究所）

第6回 9月11日

『グローバル化と産業のあり方を考える——多国籍企業時代の産業・地域政策』北田芳治・会員（東京経済大学名誉教授）

『鈴木都政の挫折と石原都政の世界都市構想——世界都市＝東京をめぐる80年代・90年代の動向』武居秀樹・会員（都留文科大学）

第7回 10月9日『右翼ポピュリズムと石原都政』北村浩・会員（政治経済研究所）

第8回 11月27日『石原都政と米軍基地問題——横田基地を中心に』南雲和夫・会員（法政大学非常勤講師・政治経済研究所）

第9回 12月18日

『ロンドン都政について』竹内真雄・会員（東京都庁・主税局）

『首都における都市計画の日英比較——ニュータウン政策の比較検討を中心に』小川愛（都留文科大学4年生・武居ゼミ）

第10回 2005年2月26日『ニュー・パブリック・マネジメントと特別区』柳田純也（政治経済研究所）

第11回 4月2日『「世界都市＝東京」論の形成・成立・展開』武居秀樹（都留文科大学）

第12回 5月14日『石原都政と教育政策の展開——研究視角の確立にむけて』小池一水（東京都教育庁）

※第12回研究会から石原都政の政策の具体的な検証を開始している。

（東京問題研究会事務局 武居秀樹）

シンポジウム「都市空襲を考える」に参加して

原 直 男

知らなかった日本軍の重慶爆撃

12月4日午後、歩いて30分ほどの深川江戸資料館で開かれた、東京大空襲・戦災資料センター・財団法人政治経済研究所主催のこのシンポジウムに参加した。

早乙女勝元・センター館長の開会あいさつの後、前田哲男・東京国際大学教授「アジアにおける戦略爆撃の開幕日本軍による重慶爆撃」、建築家・三沢浩「あるアメリカの建築家と東京大空襲」、荒井信一・茨城大学名誉教授「ドイツにおける空襲の記憶」の講演がおこなわれた。折からイラクでは、アメリカ軍によるファルージャ総攻撃が地上と空から激しくおこなわれている時期だった。攻撃はいまも部分的に続いていて、これまでの死者（大多数はファルージャ市民）は6000人を超えるのではないかという。

三つの講演に衝撃を受けた。日本軍による重慶爆撃、長谷川清・海軍中将（当時）が重慶爆撃に関与していたこと、建築家・レーモンドが東京大空襲に協力していた事実、ドイツの都市（160都市以上）への連合軍による空襲で60万人が死亡（うち子ども8万人）したことを初めて知った。

「日本航空戦力による中国・重慶に対する爆撃」は、1938年12月から「二年半、二一八回にわたって続き、一万一八八五人の、主に市民を殺した無差別攻撃。ピカソが「ゲルニカ」で告発したゲルニカ爆撃（1937年4月）は、1回の攻撃で1700人近くが死亡、

900人が負傷した。ゲルニカ爆撃は知っているのに、「ゲルニカを引き継ぐ『拡大された無差別殺戮』」である重慶への爆撃は知らなかった。（「」内は前田レジュメ）

前田教授は、8月、サッカーのアジアカップのとき、重慶のスタジアムでわき起こった日本代表選手、日の丸・君が代に対する激しいブーイングについてふれた。マスコミは、こういうあるまじき事態が引き起こされたのは、「江沢民前主席時代の『反日教育』の結果」と報じた、しかし、重慶市民の記憶には重慶爆撃があったのではないかと。司会者（コーディネーター）の北村実・早稲田大学名誉教授も事件のとき、学生に重慶爆撃の歴史を話した、と発言した。ああそうなのか、事件の背景にこういう歴史があったのだ。

それを聞くまでぼくは、『反日教育』は疑問だが、サッカー観戦の態度としてはいき過ぎだ。2008年の北京オリンピックはだいたいようぶかな」と見ていた。マスコミの俗論におかされたもので恥ずかしい。新聞も「反日教育」をいうならその内容を具体的に解説し、なぜブーイングするのか重慶市民に直接問いかけたり、キーワード「重慶爆撃」を指摘すべきだと思うのだが、読み方が悪かったのか記憶がない。日本サッカー協会と選手、サポーターもそれを教えられず、知らないままに重慶に入ったのだろう。かれらが記念碑に献花するなどのことをしていたら、こんな事態は回避されたかもしれない。ブーイングが沈静化したのも、中国当局の市民への説得に負うところが大きかったのではなかったか。

きょう『平凡社 大百科事典』を見てみた。「ゲルニカ」の項には「ドイツ空軍の爆撃に

より破壊された悲劇」は書かれているが、「重慶」には「日本航空戦力による爆撃」と被害は記述されていなかった。

(2004. 12. 21)

海軍大将・長谷川清

「海軍大将・長谷川清」を知ったのは、井上ひさしの芝居「紙屋町さくらホテル」の登場人物としてだった。井上演劇にふれたのも、これが最初だった。初演（1997年10月～11月）をNHKテレビ（録画）で見た。その年の暮、大掃除かのとときに偶然スイッチを入れたら、途中で切れなくなってしまった。

「（日本）新劇への賛歌」だと思った。2001年4月、新国立劇場の舞台上で再演を見た。テレビを超える感激を味わった。戯曲も読んだ。「登場人物」9人のなかに、「長谷川清（62）」とある。この共感を呼ぶ人物を大滝秀治が絶妙に演じた。井上演劇に魅せられて、その後つぎつぎ10公演以上を見た。ナンバー1をあげるとすれば、やはりこの作品だ。

「プロローグ（昭和二十年〔一九四五〕十二月十九日〔水〕の午後。東京・巣鴨拘置所）。押しかけて、戦犯として拘留してもらいたい、と迫る長谷川、応対するGHQ「日本人戦争犯罪人審査委員会」日本側スタッフ・針生武夫。針生は長谷川の経歴をあげながら、それを拒む。アメリカ合衆国駐在 日本大使館武官、呉海軍工廠長官、ジュネーブ軍縮会議日本全権、海軍次官、横須賀鎮守府司令長官、軍事参議官（「陛下の軍事面の相談役」）。

「長谷川清」が、1945年5月15日（火）午後6時、広島・紙屋町さくらホテルに現われたとき名乗ったのは、「腹痛の妙薬、越中富山の反魂丹ほんごんたんの地方巡回販売人・古橋健吉」。天皇の密使として「ひそかに陸軍の本土決戦の進捗状況を探る途次、広島まで来たのだった。尾行してきたのが、陸軍省軍事資料課

主任・陸軍中佐・針生。ふたりはホテルに滞在していた「移動演劇隊さくら隊」の新劇俳優、丸山定夫、園井恵子などに誘われて隊員となり、「必勝祈願！傷痍軍人と産業兵士のための慰問の夕べ」で「無法松の一生」を演ずることになる。丸山の指導によってしだいに芝居、新劇の魅力にとりつかれてゆく人々。9人がひとり欠けても芝居は成り立たない。ホテルの経営者・神宮淳子が「第一級敵性外国人」として広島捕虜収容所連行されるのを回避させるため、「しかるべき手をいくつか打ってきましょう。」と決然と出かけてゆく「長谷川清」。終幕の「エピローグ二」。淳子の「古橋さんには、なにかたいへんお世話になっているような気がしてしかたがないんです。でも、それがなんだか分からない…。」ということばと、「すみれの花咲く頃」の歌声に送られて「長谷川清」は去ってゆく。5月17日（木）午後9時だった。

12月4日のシンポジウムで、前田教授の口から重慶爆撃の現地責任者（肩書を聞き落とした）として「はせがわきよし」という名前が飛び出したのにはびっくりした。「紙屋町さくらホテル」の「長谷川清」と同名だ、同一人物ではないか、と思った。閉会后、前田氏に肩書を質問した。「……司令長官ですよ。南京事件当時からです」ということだった。上が聞き取れなかった。「井上ひさしさんの芝居『紙屋町さくらホテル』に登場するのと同じ人物ではありませんか」とも聞いてみた。芝居は見えていない、ということだった。

帰宅して戯曲を見ると、針生のあげる「長谷川」の経歴のなかに、上のように「海軍次官」があった。『南京事件』（笠原十九司著、岩波新書）も調べてみた。

一九三六年八月、海軍は、それまでの「帝国国防方針」が陸軍の方針にもとづいてソ連を主敵国とする「北進論」であったのを、米英を仮想敵国とする「南進論」を入れさせ、「南北並進論」に改訂させることに成功した。このときの海軍省海軍次官として「帝国国防方針」の改訂に奔走したのが、第三艦隊司令

長官となって盧溝橋事件以後の海軍の日中全面戦争作戦を指揮した長谷川清中将だった。

同書によれば、長谷川中将は、南京攻略（1937年12月）に先立つ8月、南京空襲をおこない、陸軍の作戦に協力した、という。

これで、同一人物と考えてよいと思った。劇作家は実在の人物をモデルにして、さくらホテルでしだいに芝居の虜になってゆく、なんとも魅力的な、知的で柔軟な人物を創造した。言語学者・大島輝彦が持ち出した教え子・津田克太郎の「N音の法則」（「否定の音にはN音が使われることが多い、しかもそれは世界的な傾向である」）に対して、思わず、英語ネイ、フランス語ノン、ドイツ語ナイン、スペイン語ナダ、イタリア語ノー、ロシア語ニエットをすらすらいってしまう場面は、経歴を裏づけていて秀逸だ。

それに対して軍事史研究者、歴史家はあくまで、実在の人物としての「長谷川清海軍中将」、海軍を代表して「南進論」を主張し、重慶無差別爆撃の司令官だった彼、を描いている。

ふたつの「長谷川清像」が結びつかなくて、劇作家の虚構と歴史家の歴史的事実との間をウロウロした。そして、戯曲の「エピローグ一」（昭和20年12月19日午後）に戻った。そこには、「長谷川清」の自己批判、戦争責任を負おうとする姿が書かれている。

長谷川わたしは、……わたし自身を含めた戦争の指導者の決断力のなさによって生を断ち切られたひとたちの、名代に選ばれたような気がします。このごろは余計、そう思えてしかたがない。……（右手の指を、親指から一本一本、左手で包み込むように握っていきながら）これは丸山定夫さん、園井恵子さん、戸倉刑事、大島輝彦先生、神宮淳子さん、（左手の親指に移る）熊田正子さん、浦沢玲子さん……そして、この体全体が、指導者たちの決断力のなさによって生を断たれたすべての日本人……。そんな気がしてしかたがない。そういうわたしが消せますか。

針生……。

長谷川また、たとえ、わたしを消せたとしても、亡くなったひとたちは、もう消せませんよ。死者はもう二度と死ぬことはないんですからな。

針生分かりました。手続きは、お取しましょう。

長谷川そう願います。

ひとつの「長谷川清」となってつながってきた。重慶爆撃には、直接ふれてはいないが……。

(2004. 12. 28)

天皇の「御聖断」と「長谷川清」

海軍大将・長谷川清について、この上ないような文章を、今朝、読んだ。

この文に出会うまでには小さなドラマがあった。まず、あるかな、と思いながらインターネットで「海軍大将・長谷川清」を検索した。『本郷』という雑誌（歴史書の出版社・吉川弘文館が発行）の40号に、長谷川についての文章があった。バックナンバーがほしい、と、正月休み明けを待って、祈るような気持で電話した。「少し汚れているが、1冊だけある」という返事で、おまけに、PR誌だから無料でいい、という。ありがたくいただくことにした。そしてきょう、親族による文章に接することができた。快哉をあげた。ゆかいな気分だ。

余談。ネットには海軍大将77人全員の名簿・経歴があって、写真つきで紹介しているものもある。長谷川は、有名な山本五十六の1期先輩、海軍省次官も山本の前任者だった。次官引継ぎのようすが、阿川弘之『山本五十六』に書かれている。本屋で新潮文庫版を立ち読みした。そして、脱線そのもの。「女性関係もなかなかのもの」と書いたのもあって、実相寺さんの文章「芸者さんにせつせと手紙を書いていた祖父」の像とも重なる。

シンポジウムで開会あいさつをした、早乙

女勝元・センター館長の著書『東京大空襲』（岩波新書、1971）には、昭和天皇が1945年3月18日、江東区などの被災現場を視察したことが書かれている。『江東区史』かなにかで、富岡八幡前を歩いている写真を見たことがある。長谷川清はすでに天皇の「軍事参議官」になっていた（1944年12月30日発令）から、その視察に同行していた可能性がある。同行していなくても、8月まで続いた東京の惨状（住居のあった「渋谷の大山町」は一部しか焼けていないが、隣町・円山町や神泉町は焼失している。〔東京空襲を記録する会復刻『東京都35区区分地図帳』〕をどう見たのだろうか。そこに、数年前自らが現地司令長官として実行した重慶、南京空襲のむごたらしさを重ねて見たのではないだろうか。

『歴史に生きる鈴木正四』（自費出版、2003）の冒頭に、「兄正二への手紙」が掲載されている。

「すでに昔話となったが平和のいきさつを簡単に物語らう。／天皇、重臣等に平和の気運が起ったのは今年三月十日の江東壊滅以降のやうである。」以下、4月から8月14日に「有名な陸下の断が下」るまでの経過がのべられている。筆者は当時、「研究室（総合インド研究室一原）の木原が外務省、迫水前書記官長のブレイン役を勤めその木原が俺の意見を徴するといふ関係にあった」。

歴史のヒーロー・ヒロイン

長谷川 清

は せ がわ きよし

一人の地味な海軍大将のことを書く。わたしの母方の祖父のことである。福井出身で、長谷川清という。終戦時には軍事参議官であった。台湾総督もやり、第三艦隊司令長官の時代もあった。旗艦出雲に乗っていたおり、わたしは生まれた。初孫の誕生をワインで祝った、という祖父からのハガキを母は大切にしていた。上海事変後のパネー号事件のときには、悩んだことだろう。誤爆でアメリカの艦船を沈めたのだから。というのも、祖父はアメリカ大使館の駐在武官だった頃からアメリカ鼎頂だったからだ。戦後、戦犯として巣鴨刑務所に収監されたときも、すぐに出所して来た。それはアメリカ時代のコネクションによるものとわたしは思っている。渋谷の大山町にあった祖父の家に、駐留軍の軍人が大勢遊びに来ていた。小学生のわたしにとって、強烈な印象であった。

数年前、「紙屋町さくらホテル」という戯曲で、井上ひさし氏が登場人物の一人を、祖父をモデルにして描かれたことに驚いた。陛下の勅命を受け、荒廃した日本に残る戦力を視察して回る役割を担ったことが、昭和四十五年の夏の盛り、祖父は他界した。その初夏に、わたしは第一作目の長編劇映画を公開していた。「無常」という、近親相姦を主題にした作品だった。初孫の作品ということで、祖父は映画館に足を運んだらしい。そんなふしだらなものを見せるから寿命が縮まったのだ、と親族に揶揄された。でも、若者さんたちへ、せつせと手紙を書いていた祖父はそんな映画にシヨックを受けるほどヤワではなかった、とわたしは思っている。

（じつそうじ あきお・映画監督）



その戯曲には巧みに描かれていた。劇中の祖父は何とも格好がよかった。フィクションとはいえ、井上さんの調理が身内のわたしには面映ゆかった。晩年、自由が丘に転居していた祖父は、『サンデー毎日』のクロスワードとパチンコで、卒寿ちかくまで頑張った。その祖父に、きちんと歴史の聞き書きをしなかったことを悔やんでいる。日本海海戦を描いた有名な絵画で、三笠艦橋に立つ東郷司令長官の背後で測距儀を覗いているのが、少尉の祖父だ。帽子しか見えないが……。

ある海軍大将 実相寺昭雄

出典 『本郷』 No. 40 12002. 7、吉川弘文館

シンポジウムの報告者・荒井信一・茨城大学名誉教授は、当日のテーマは「ドイツにおける空襲の記憶」だったが、『日本の敗戦』（岩波ブックレット、1988）という著書がある。そのなかに記している。

天皇はすでに五月はじめには戦争終結をいそぐ方向に気持ちがかわっていたが、このような悲観的情報がつぎつぎもたされる（硫黄島全滅、沖縄戦の敗北、連合艦隊全滅、ドイ

ツ無条件降伏など一原) なかで、ついに六月二十二日、戦争指導会議の構成員(首相・外相・陸相・海相・参謀総長・軍令部総長)を召集した。

天皇はそこで、「戦争の指導に就ては曩に御前会議に於て決定を見たところ、他面戦争の終結に就きても此際従来の觀念に囚わることなく、速かに具体的研究を遂げ、之が実現に努力せんことを望む」と申しわたして終戦工作を指示したのである。(本土決戦へ2 沖縄の悲劇)

戯曲『紙屋町さくらホテル』。

針生陛下じきじきの仰せを賢んで承ったあなたは、その嚇嚇たる経歴をかくし、その名も偽って、この四月から五月にかけて、日本全土をお歩きになっていた。……あなたの目的は常にただ一つ、陸軍側の本土決戦の備えを探ることにあった。ひそかに陸軍の本土決戦の進捗状況を探れ、これが陛下の御密命だったんですね。

長谷川わたしの報告を境に、わが国の基本方針が百八十度の大転換を始めた。(直立して)陛下は、それまでの本土決戦策を御捨てあそばして、ソ連を仲立ちにした和平策を御採用になった。……だが、その和平工作がまるで前へ進まない。

劇作家はこう書いている。どこまでが史実で、どこからが創作かは分からない。海軍大将・長谷川清は、戯曲が書く「御密命」にもとづく行動をしたと見てよいのだろうか。じつは、シンポジウムの出席者に荒井信一・名

誉教授の名を見たとき、もし時間があれば、戯曲の「長谷川清」と海軍大将・長谷川清とが同一人物か、を質問したいと思っていた。それが、最初の前田教授のお話のなかに、突如、対照的な人物として出てきたのだからびっくりした。

びっくりしたのはこれだけではない。三沢浩氏の「レーモンド批判」にも驚いた。レーモンドの名は、『日本の近代建築(上)(下)』(藤森照信著、岩波新書、1993)で、聖路加国際病院の共同設計者、日本の近代建築に大きな影響をおよぼした建築家として知った。この本の索引「レーモンド」には、17か所も記述があることが示されている。聖路加病院は10数年前、残念ながら礼拝堂を除いて建て替えられてしまった。前の病院は、中に入ったことはなく外から眺めていただけだったが、美しい建物だった。その彼が東京大空襲を「成功」させるのに加担していたとは。帰宅してから『日本の近代建築(下)』を見てみると、「レーモンドは、日本での経験を買われ、米軍の日本都市空襲計画に参画し、アリゾナ砂漠に東京の下町を再現し、焼夷弾の有効性を試している。」という2行があった。

(2005.1.8)

昨年12月4日に開催されたシンポジウム「都市空襲を考える(第3回)」に対して、原直男氏(江東区越中島在住)より、3回にわたって感想がよせられました。本稿はその全文です。

〈シンポジウム全記録〉都市空襲を考える(第3回)

財団法人政治経済研究所・東京大空襲・戦災資料センター

2004年12月4日に開催したシンポジウム「都市空襲を考える(第3回)」の記録です。

アジアにおける戦略爆撃の開幕——日本軍による重慶爆撃(前田哲男:東京国際大学教授)

あるアメリカの建築家と東京大空襲(三沢浩:建築家、戦災資料センター顧問)

ドイツにおける空襲の記憶(荒井信一:茨城大学名誉教授・日本の戦争責任資料センター共同代表)

出版案内

世界経済研究・分析の情報ソース——待望の翻訳

『経済統計で見る 世界経済2000年史』

アンガス・マディソン＝著
金森久雄＝監訳
(財)政治経済研究所＝訳



出版社 柏書房株式会社

〒113-0021 東京都文京区本駒込1-13-14
電話03(3947)8251

本体価格 13,000円
刊行日 2004年11月
ISBN 4-7601-2620-1
版型 B5判・上製
総頁数 440頁

内容

紀元1～2000年。全世界の人口、実質GNPを通観できる壮大なスケールの歴史統計。世界の所得と人口の長期的変化を包括的に数量化。豊かな国々の成功と、遅れた地域での障害はなにかを明らかにする。